# 顔面問答

東京学連剣友連合会　会長
髙橋（たかはし）　亨（とおる）

昨年12月に「第26回学連剣友剣道大会」が開催されました。10月に東京学連剣友連合会（現在83大学支部、１６２０名加盟）の会長を仰せつかった私は、国際剣道のあり方が問われている現状を踏まえ、新しい試みとして「外国大学ＯＢ連合チーム（７名）」を招待しました。大会終了後に、外国剣士たちの感想文（本誌3月号参照）の中に「相手がいるからこそ自分自身がいる」という一文を見たとき、ふと学生時代に湯野正憲先生（範士八段・元東京都剣道連盟副会長）に奨められた『顔面問答』を思い出しました。中国の清朝時代の兪　曲園という詩人が残した随筆です。

「口」と「鼻」と「眼」との間で、自分こそが最も重要な任務を果たしている！　という論争の挙げ句、三者は「眉毛」を攻撃します。「なにゆえ君は僕らの上で偉そうに威張っているのか、一体君にはどういう役目があるのか」と詰問され、眉毛は次のように答えます。「いかにも君らは重大な役目を持っている。食物を摂り、呼吸をし、ものを看視してくれている君たちのご苦労には、実に感謝している。改まって君たちから、〈君の役目は何だ〉と問われると、お恥ずかしい次第だが、何をしているのか自分ながらこれだと答えられない。ただ祖先伝来、ここにいるというだけで、日夜すまぬすまぬとは思いつつ、まあこうして、一所懸命に自分の場所を守っているわけだ」。

どこの稽古会でも、その「道場の顔」と呼ばれる人がいるものです。殆ど、指導的な立場の方が多いのですが、必ずしも高段位者とは限りません。私が所属する剣友会にも、一昨年90歳で亡くなる直前まで、道場に週2回立ち続けた方がいました。ご自分より段位が上の若手に対しても、容赦なく稽古をつける姿は筋が通っていました。外国人や女性たちからの人気も絶大でした。さすがに晩年は杖が手放せませんでしたが、稽古後には杖を忘れて帰ることもしばしば。剣道を学びながら剣道に生かされているとはどういうことか。言葉ではなく、稽古場での姿で私たちに教えてくれました。

本会は月例稽古会を行っています。3月の関東近県への「武者修行」まで、年間を通して毎回参加される数多くの先輩方がいます。共通するのは真摯な稽古態度とともに、第二道場でも分け隔てなく人の話を聞こうとする明るさです。出身大学や卒業年次のしがらみを飛び越え、ともに剣道を楽しむ人が人を呼ぶのか、思わぬ出会いの輪が広がります。社会人としての様々な経験からもう一度剣道をとらえ直し、自分が今後どのように向き合うのか。剣道の魅力について、社会人としての視点をもつ方々こそが学連剣道の伝統を支えているといっても過言ではありません。

剣道は、今後ますます各領域で国際的展開が予想されます。同時に「日本の剣道とは何か」の問いかけもさらに鋭くなるでしょう。試合や段位称号に関する論争や批評はさておき、「それぞれの存在を認め合う稽古とは何か」を示すことが国際的展開には欠かせない視点になるのではないでしょうか。「理合」を超えた姿の教え。いわば、「生涯剣道」の中味がいま問われているのかもしれません。

ところで、『顔面問答』の著者は、この問答のあと、「自分は今日まで口と鼻と眼の心懸けで暮らしてきた。しかしそれは間違っていた。今後は、ぜひ眉毛の心懸けで、世を渡りたい」と結んでいます。そういえば前記の90歳の先輩も立派な眉毛の持ち主でした。

（東京藝術大学教授
・剣道教士八段）